

大学の交換留学生と日本人中学生が取り組む国際共修の実践

—— 茨城大学と勝田中等教育学校との連携の事例から ——

瀬尾 匡輝*・野上 泉**

(2024年10月21日受理)

A Practice of Intercultural Collaborative Learning between University Exchange Students and Japanese Junior High School Students: A Case of Collaboration between Ibaraki University and Katsuta Secondary School

Masaki SEO and Izumi NOGAMI

キーワード：国際共修，授業実践，多様な背景を持つ子どもたち，プロジェクト活動

本稿では、2023年度に茨城大学と勝田中等教育学校が協働で行った国際共修の実践を報告し、大学と中学校が連携して行う国際共修の可能性について議論する。国際共修とは、「言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流（meaningful interaction）を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を想像する学習体験」のことで、「意見交換、グループワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ（考察・行動力）やコミュニケーションスタイルから学び合う」（末松，2019：p. iii）。本稿で報告する実践では、計7回の茨城大学と勝田中等教育学校の連携授業を行い、本実践に参加した留学生と中学生は最終的に、「多様な背景を持つ子どもたちが集う理想的な中学校」とはどのような学校かをグループで発表した。本稿では、現場の教師が主体的に教育実践を営み、そしてそれをふりかえり、自らの理論を構築していくとするクマラヴァディヴェル（2022）が主張するアクションリサーチの立場に基づき、筆者らが行った実践を詳細に記述する。授業後に行ったアンケートからは、留学生と中学生の両者が本実践を肯定的に捉えていることが窺えたが、課題も見つかった。

はじめに

2023年4月、岸田文雄内閣総理大臣を議長とした教育未来創造会議において「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ（J-MIRAI）」が取りまとめられた。その中では、大学等の高等教育機関での日本人学生の海外派遣や留学生の受け入れによる促進だけではなく、「初等中等教育段階から多様性・包括性の涵養に向けた教育の充実を図ることにより、多文化共生社会への変革や国際頭

*茨城大学グローバルエンゲージメントセンター/地域未来共創学環

**茨城県立勝田中等教育学校

脳循環の実現を目指す」(教育未来創造会議, 2023, p. 4) ことが掲げられた。そして、今回の施策では、日本人学生の海外への派遣、外国人留学生の日本への受け入れだけではなく、教育の国際化に関する目標値も定められた。中等教育段階では、2033年までの教育の国際化に関する目標として以下を目指すことが示されている。

- 中学・高校段階におけるオンライン等を利用した国際交流活動を行っている学校の割合 (20%→100%)
- 姉妹校提携等を活用し、対面での国際交流を行う高校の割合 (18%→50%)
- 英語で複数教科の授業を受けられる高校(コース等を含む。)の数 (50→150)
- 高校入試で外国人特別枠の設定を行う都道府県の数 (17→47)

(教育未来創造会議, 2023, p. 17)

これまでの留学促進にかかわる施策(例えば、「これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)」(文部科学省, 2013))で、中等教育段階では、英語による英語授業の実施、少人数での英語指導体制の整備、ネイティブスピーカーの配置拡大など、英語教育についての言及が多かった¹。しかしながら、今回のJ-MIRAIでは、英語教育ではなく、教育の国際化が中心に据えられており、日本国内の半数の高校において対面による国際交流を実施し、日本国内のすべての中学校及び高校においてオンライン等を活用した国際交流活動を実施することが目指されることになった。だが、現時点では、いずれの活動も全校の2割程度の実施に留まっており、中等教育機関においてそのノウハウが蓄積されているとはいえない。そこで、本稿では、茨城大学グローバル教育センター³及び勝田中等教育学校が連携して2023年度に実施した国際共修の実践をふりかえり、大学と中学校が連携して行う実践の可能性を議論する。

国際共修とは

「これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)」が公表された翌年の2014年に「スーパーグローバル大学創生支援事業」が開始された。事業では、「世界トップレベルの大学との交流・連携を実現、加速するための新たな取組や人事・総務システムの改革などの体質改善、学生のグローバル対応力育成のための体制強化など、徹底した国際化に取り組む大学を重点支援」(文部科学省, n. d.) することが目指された。そして、本事業に採択された大学では、日本人学生を海外に派遣することが前提となっていた。しかしながら、末松(2017)が指摘するように、経済的な理由、語学能力の不足、就職活動に支障が出るなどの理由から、留学に踏み出せない学生も多くいる。そのような状況で、末松(前掲)は、Wachter(2003)やKnight(2004)の「Internationalization at Home(内なる国際化)」の概念を用いて、「海外留学の代替経験や、留学啓発および準備教育をカリキュラムに取り入れることで大学教育のグローバル化を図る方策」(p. 46)を打ち出し、その具体的な方法として、国際共修授業の活用を提言した。末松(2019)は、国際共修を次のように定義している。

言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流 (meaningful interaction) を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を想像する学習体験を指す。単に同じ教室や活動場所で時間を共にするのではなく、意見交換、グループワーク、プロジェクトなどの協働作業を通して、学習者が互いの物事へのアプローチ (考察・行動力) やコミュニケーションスタイルから学び合う。この知的交流の意義を振り返るメタ認知活動を、視野の拡大、異文化理解力の向上、批判的思考力の習得、自己効力感の増大などの自己成長につなげる正課内外活動を国際共修とする。(p. iii)

国際共修について、J-MIRAI においては明確な言及はないものの、2024 年度に募集が開始されたスーパーグローバル大学創生支援事業の後継事業である「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」で、そのタイプ1の「地域等連携型」において地域との連携による多文化共修科目の開発・実施をすることが支援の対象となっており、国の施策レベルでも国際共修が大きな位置づけにあることが窺える。国際共修は、これまで多くの国内の大学でも取り組まれており、数多くの報告がなされている。しかしながら、末松 (2019) が「国際共修の学習者には、大学生のみならず、地域社会の住民や初等中等教育機関に学ぶ児童・生徒などの、世代や立場を超えた多様なステークホルダーも含まれる」(pp. iii-iv) と述べてはいるものの、その多くの実践は大学の学生を対象としており、初等中等教育での国際共修の実践や大学生と中学生が協働で取り組む国際共修の実践の報告は極めて少ない。

大学の留学生と中学生が協働で取り組む活動として、立命館大学政策科学部の桜井ゼミに所属する留学生8名と岡山県備前市の日生中学校の3年生55名が参加した国際交流プログラムがある(桜井, 2020)。この実践では、留学生が日生中学校を訪問し、午前に、1) 留学生による母国についての紹介、2) 生徒が総合的な学習の時間で取り組んでいる地元の漁師と協働した海洋実習についての紹介、3) フリーディスカッションとしてグループに分かれてディスカッションを行った。そして、午後には、ディスカッションをしたグループごとに地元の漁師の船に乗り、アマモ (流れ藻) の回収作業を行った。また、同じような大学の留学生と中学生が取り組む活動として、金子 (2020) は、明海大学の留学生を足立区内の中学校に派遣して実践する異文化交流会を報告している。異文化交流会は、1) 中学生が英語でコミュニケーションする楽しさを体験すること、2) 中学生が異文化理解を深めること、3) 留学生が日本人や日本文化への理解を深めることを目的に実践された。交流会では、留学生が各中学校の英語の授業に参加し、グループに分かれて、英語で自己紹介をしたり、自国文化を紹介したりする活動を行った。

桜井 (2020) と金子 (2020) はともに国際共修を目的とした実践ではなく、留学生と中学生が交流することを目的とした一日の国際交流活動である。そのため、意見交換やグループワークを通じた意味ある交流が行われてはいるものの、国際共修の定義にあるような「意味ある交流 (meaningful interaction) を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を想像する学習体験」となっているとはいえない。中学生を対象とした国際共修の実践の報告が少ないなかで、仙石ほか (2022) では、大学の留学生と中学生が参加した国際共修プログラムについて、国際共修と世代間学修の視点から考察を試みている。実践には、大学の留学生2名と中学生約40名が参加し、2020年1月から8月の間に中学校の英語および総合的な学習の時間を使って計5

回行われた。プログラムの1回目で互いの自己紹介、故郷の紹介を行い、2回目からプロジェクト活動を行った。プロジェクト活動は、中学生が留学生に向けて観光プランを提案し、提案した観光プランを実際に実施するというものであった³。仙石ほか(前掲)では、実践に参加した中学生のリフレクションシートをもとに分析がなされており、大学の留学生との国際共修を通して中学生に学びがあったことが描き出されている。しかしながら、実践の記述は限られており、今後同じような実践に取り組みたい読者にとって有益な情報になっているとはいえない。

そこで、本稿では、大学と中学校が連携して行う国際共修の可能性を示し、同じような実践に取り組みたい読者にとって参考になるよう、より詳細に実践を記述することに重きを置く。これは、現場の教師が主体的に教育実践を営み、そしてそれをふりかえり、自らの理論を構築していくとするクマラヴァディヴェル(2022)が主張する立場に基づくアクションリサーチの手法である。この考えでは、Kumaravadivelu(2001)の以下の主張に基づき、実践が記述される。

高度で、統計的に蓄積され、制御変数を用いた実験的な研究が必ずしも必要なわけではない。それよりもむしろ、教室で目と耳と心を開き、どのような学習者のグループで、どのような目的をもとに学習しているときに、何がうまくいくのか、何がうまくいかないのかを観察し、そして、教育目標を達成するためにどのような変化が必要なのかを判断することのほうが大切なのだ。(p. 550, クマラヴァディヴェル(2022)より)

それゆえ、本稿では、統計などを用いた科学的/実験的な記述ではなく、実践者である筆者らの観察による語りを中心に実践を描き出す。本稿の読者には、自身の現場でどのように生かせるのかを考えながらぜひ読んでいただきたいと思う。そうすることで、現場に根ざした知を新たに生み出すことができると考えている。

実践について

本稿で紹介する国際共修の実践は、茨城大学と勝田中等教育学校の教員が協力して、2023年11月から2024年1月にかけて計7回行った(基本的には各回55分、1回は1日のフィールドトリップ)。本国際共修授業の最終的な課題としては、茨城大学の留学生と勝田中等教育学校の中学3年生が混合のグループとなり、多様な背景を持つ子どもたちが集う理想的な中学校とはどのような学校なのかを考え、それについて発表をした。なお、授業は全て日本語で行った。

茨城大学側は、交換留学生を対象とする日本語教育のプログラムである「日本語研修コース」の「レベル4(総合)」を履修する交換留学生が参加した。「レベル4(総合)」は、日本語能力試験のN3及びN2相当の留学生が受講する中級後半レベルの科目であり、合計9名(ベトナム3名、インドネシア2名、オーストラリア2名、韓国1名、モンゴル1名)の留学生が受講した。科目は週3回(1回90分)で15週間にわたって行われ、授業では総合教科書『できる日本語中級』(嶋田, 2013)を用いた。また、教科書に沿った学習だけではなく、2つのプロジェクト活動を行った。1つ目のプロジェクト活動は、茨城大学生のライフスタイルについてアンケート調査を行い、それを報告する

ものであった。2 つ目のプロジェクト活動は本稿で紹介する勝田中等教育学校と連携して行ったものである。

勝田中等教育学校側は、「夢探究ゼミ」のグローバルゼミを履修する3年次生（中学3年生に相当）の37名が参加した。夢探究ゼミは、総合的な学習の時間を用いて行われている活動であり、生徒は、グローバル、起業家、サイエンス、プログラミングの4つのゼミの中から希望するゼミを1つ選び、それぞれのゼミ毎にテーマを設定し、探究活動を行う。そして、その成果を3月に行われる「探究フェス」で発表をする。本実践の対象となるグローバルゼミでは、後期計19回の授業（1回の授業は55分）で、2つの活動が行われた。1つは、ひたちなか市国際交流協会と連携をして、ひたちなか市在住の外国人に、英語以外の外国語として中国語と韓国語を教えてもらうというもの

表1 国際共修授業の各回の概要

	茨城大学	勝田中等教育学校
※	11月15日（水）の授業 映画『バベルの学校』を視聴した。	11月1日（水）・15日（水）の授業 映画『バベルの学校』を視聴した。
※	11月17日（金）・20日（月）・21日（火）の授業 『バベルの学校』視聴のふりかえりを行い、その後、11月29日の国際共修授業での発表に向けて準備をした。	11月20日（月）の授業 茨城大学の教員（瀬尾）が勝田中等教育学校を訪問し、グローバルゼミの生徒に対して、講義を行った。
1	11月29日（水）の国際共修授業 茨城大学の留学生が勝田中等教育学校を訪問し、留学生の各国の教育事情について発表をした。	
※		12月6日（水）の授業 12月20日の国際共修授業での発表に向けた準備を行った。
2	12月13日（水）の国際共修授業（1日のフィールドトリップ） 茨城大学の留学生と勝田中等教育学校の生徒がつくば市及び常総市にフィールドトリップに出かけた。	
3	12月20日（水）の国際共修授業 茨城大学の留学生が勝田中等教育学校を訪問した。勝田中等教育学校の生徒が、茨城大学の留学生に向けて日本の教育事情と勝田中等教育学校の特色について発表をした。プロジェクトの課題を再確認し、グループで最終発表について考え始めた。	
4	1月10日（水）・17日（水）の国際共修授業 ・オンライン会議システム ZOOM 上に茨城大学の留学生及び勝田中等教育学校の生徒が集まり、24日の発表に向けた準備を行った。	
5		
6	1月24日（水）の国際共修授業 茨城大学の留学生が勝田中等教育学校を訪問した。「多様な背景を持つ子どもたちが集う理想的な中学校」についてグループで発表を行った。	
7	1月31日（水）の国際共修授業 茨城大学の留学生が勝田中等教育学校を訪問した。前回のグループ発表をもとにした、ふりかえりを行った。	

である。そして、もう一つの活動が、本稿で紹介する茨城大学と連携して行ったものである。勝田中等教育学校は、2021年に開校された新設校であり、2023年度の夢探究ゼミは初めての実践であった。表1に、本国際共修授業の各回の概要を記し、以下に各回の詳細を述べる。

国際共修授業開始前

国際共修授業開始前に、両校の留学生及び生徒は2013年にフランスで制作されたドキュメンタリー映画『バベルの学校』(ジェリー・ベルトウッチェリ監督)を視聴した。この映画は、フランスのとある中学校のフランス語の集中トレーニングを行う「適応クラス」の1年間を追ったドキュメンタリーである。この映画を留学生及び生徒に見せたのは、プロジェクトの最終課題であった「多様な背景を持つ子どもたちが集う理想的な中学校」について考えてる上で、イメージがわきやすくなるのではないかと考えたからである。視聴後、茨城大学では11月17日(水)の授業で、勝田中等教育学校では11月20日(月)の授業で、それぞれ茨城大学の教員(瀬尾)のファシリテーションのもと、『バベルの学校』視聴のふりかえりを行った。ふりかえりで留学生からは、現在居住している国に移民した際に適応クラスのようなプログラムに参加したこと、交換留学生として日本にいてることで感じる不安など、自身の経験に基づく感想が述べられた。そして、勝田中等教育学校では、自分と同年代の子どもたちが、いろいろな事情で国を移らねばならなかったことやその苦労を目の当たりにして、おおいに感じることもあり、ドキュメンタリーのなかで背景の異なる生徒たちが心を通じさせていく様子に感銘をうけている姿が見られた。

その後、両校では、瀬尾が日本国内(特に茨城県)の在留外国人や外国にルーツを持つ子どもたちの状況について、どれぐらいの在留外国人及び外国にルーツを持つ子どもたちが日本や茨城に暮らしているのか、そしてかれらがどのような困難を抱えているのかについて講義を行い、本実践の大まかな流れについて説明をした。また、勝田中等教育学校の生徒には、留学生とより円滑にコミュニケーションがとれるように、「やさしい日本語⁴」についての講義も合わせて行った。

そしてその後、茨城大学の留学生は、3回(各回90分)の授業時間を使って、11月29日の国際共修授業で行う発表に向けた準備を行った。発表の詳細については次節で述べる。

1回目(11月29日)の国際共修授業

1回目(11月29日)の国際共修授業では、茨城大学の留学生が勝田中等教育学校を訪問し、留学生9名がそれぞれの国の教育事情について、1)国の教育制度(マクロな視点)、2)自分がどんな中学生を送っていたか(ミクロな視点)、3)多様な背景を持つ子どもたち(移民、異なる民族、異なる宗教背景の人々、障がいを持つ人々などを含む)がどのように学校に通っているのか/通っていないのか、について6分程度で発表した。発表は、それぞれの国ごと(ベトナム(3名)、オーストラリア(2名)、インドネシア(2名)、モンゴル(1名)、韓国(1名))で発表し、複数いる国の留学生はペアやグループで1つの発表を準備した。マクロとミクロな視点から発表するよう伝えた

のは、教育制度を国という単位で見えてしまうと、その国の中にある多様性を見落としてしまう可能性があると考えたからである。事実、オーストラリアの2名の留学生の発表では、一人が移民の多い都市部出身、もう一人が移民が少なく比較的白人の多い地方出身であったことから、多様な背景を持つ子どもたちを受け入れる方法に違いがあることを報告していた。そして、多様な背景を持つ子どもたちがどのように学校に通っているのかについては、留学生自身も知らなかったことであり、発表を準備するなかで自国の政策について調べ、自国の多様性に対する取り組みを知るよききっかけになっていた。

留学生がクラス全体に向けて発表をした後で、9つのグループに分かれてディスカッションを行った。各グループには留学生1名が入り、それぞれのグループで、1) 発表のおもしろいと思ったところ、2) 疑問に思ったところ/もっと説明がほしいと思ったところ、について話し合った。グループに分かれて話し合いをすることで、それぞれの発表に対する理解をさらに深めることができていたようである。

2回目(12月13日)の国際共修授業

2回目の国際共修授業で、茨城大学の留学生と勝田中等教育学校の生徒はつくば市及び常総市にフィールドトリップに出かけた。勝田中等教育学校の夢探究ゼミでは、この日は「探究デイ」として、グローバル、起業家、サイエンス、プログラミングの4つの各ゼミが校外に出て活動することになっている。例えば、起業家ゼミでは、つくば市が運営する起業家支援施設である「つくばスタートアップパーク」を訪問したり、プログラミングゼミでは、ソフトウェア会社やサイエンス・スクエアつくばを訪問したりしていた。グローバルゼミでは、午前中、つくば市の JICA 筑波を訪問し、ガーナで青年海外協力隊として派遣された隊員の話聞いた。茨城大学の留学生は午前中の活動には参加せず、午後から参加した。

午後は、まず常総市にある亀仙人街を訪問した。亀仙人街は、スリランカやフィリピン、タイなどのお店が並ぶ多国籍な商店街である。もともとは日本人が経営する店舗が多く入っていたが、2008年のリーマン・ショック時に周辺の工場が閉鎖されたことをきっかけに、多くの店が閉店してしまった。そこで、亀仙人街のオーナーが、水道代や電気代を肩代わりし、在留外国人が出店しやすいようにしたところ、多国籍なお店が増えるようになった(東京新聞, 2023)。亀仙人街では、留学生と生徒は、しもつま外国人支援ネットワーク TOMODACHI の代表者の説明のもと、スリランカ雑貨店、フィリピン雑貨店を訪問するとともに、スリランカ料理の店で昼食を食べた。一か所に様々な国や地域のお店がある様子に留学生も生徒も驚いていた。また、フィリピン系オーストラリア人の留学生が、フィリピン雑貨店で子どものときに食べていたお菓子を他の留学生や生徒に説明している姿も見られた。そして、食事の際には、インドネシアからの留学生がイスラム教徒であり、宗教上食べられない物があることなどを説明し、生徒たちが興味深く聞いている姿も印象的だった。

次に、つくば市にあるスリランカ仏教寺院、スリ・サンブッダローカ寺を訪問し、住職から寺院についての説明を受けた。スリ・サンブッダローカ寺は2010年に日本在住のスリランカ人が互いにお金を出し合い、設立された。もともと民家であった日本家屋を改装しており、スリランカから絵

師を招いて壁を装飾したり、大仏像を建立したりして、スリランカ寺院らしさを出している。留学生や生徒からは、日本とスリランカの寺院の雰囲気の違いに驚く声、多くの人々が協力しながら設立・運営されている姿に感銘を受ける声が聞かれた。

その後、常総市にある水海道中学校夜間学級を訪問し、夜間学級を担当する教員から説明を受けた。水海道中学校夜間学級は、2020年に設置された茨城県内唯一の公立の夜間中学であり、1年生10名、2年生7名、3年生10名の計27名が在籍している。そのうち、22名がパキスタン、フィリピン、アフガニスタンなどからの在留外国人であり、10代から30代と幅広い年齢層の生徒が在籍している。夜間学級を担当する教員の説明では、学校の概要だけではなく、多様な背景を持つ生徒たちに対してどのように教えているのか授業風景の動画を交えながら紹介してくれた。留学生や生徒の多くは夜間学級について全く知らない、あるいは名前を知っている程度の者が多く、幅広い年齢層、多様な背景を持つ人々に対する教育の場について興味を持って聞いていた。

最後に、常総市の水海道駅前にあるTK Storeを訪問した。TK Storeは常総市の工場で働くブラジル人が増加したため、2003年にオープンした多国籍雑貨店である。今は南米からの商品だけではなく、世界中の様々な国々からの商品が多く陳列されている。ベトナムからの留学生がヌクナムを見つけ、それを他の留学生や生徒に説明する姿があった。そして、中学生も事前に調べたインコーラを見つけ、それを購入していた。

一日のフィールドトリップについて、留学生とのふりかえりで次のようなことが報告された。留学生は、大学の中では他の国や地域から来た外国人と接することはあっても、その他の場では他の外国人と接することはなく、日本国内、特に茨城には外国人はあまり住んでいないと感じていた。だが、今回のフィールドトリップを通して、茨城県内にも多様な背景を持つ人々がいるということ、そしてそういった人たちが集う場があることを認識することができた。一方で、生徒からも、中学校では、実際に外国の人と交流すると言えばALT (Assistant Language Teacher) と英語で話すだけで、英語さえ話せればよいと考えていたが、探究デイへの参加を通して、世界のいろんな文化を学び、その国の母国語でいろんな国の人と話したいと思うようになったというような声が聞かれた。

3回目(12月20日)の国際共修授業

3回目の国際共修授業では、茨城大学の留学生が再度勝田中等教育学校を訪問した。今回の訪問では、勝田中等教育学校の生徒がグループで日本の教育制度、勝田中等教育学校ではどのような教育が行われているのかについて発表をした。55分という時間の制約とどのグループの発表も同じような内容になることから、発表は9つのグループに分かれ、各グループごとに留学生1名に対して説明をした。そして、留学生がグループを移動することで、留学生は異なるグループの発表を2回聞くことができた。各発表の後にはそれぞれグループ内で質問や意見交換をする時間を設けた。

その後、大学の教員(瀬尾)が最終課題であるグループ発表について説明をした。以下、留学生及び生徒に伝えた発表の概要である。

5分間で以下の内容について発表をしてください。

- ・ 「多様な背景を持つ子どもたちが集う理想的な中学校」とはどのような学校でしょうか。
- ・ 10年後に勝田中等教育学校がそのような理想的な中学校になるためには何をしなければならないでしょうか。
 - ・ 国や県、市がしなければいけないこと
 - ・ 勝田中等教育学校がしなければいけないこと
 - ・ 生徒がしなければいけないこと
 - ・ ひたちなか市に住む人達がしなければいけないことなどについても考えましょう

そして、発表の準備に役立てるよう、瀬尾から、インクルーシブ、平等・公平・公正についての説明を行い、障がいの有無、国籍、年齢、性別（LGBTQ等の性的指向を含む）などに関係なく、互いに違いを認め合い、どのように共生していくことができるのかを考えてほしいことを伝えた。また、最後の時間にグループのメンバー内で互いに連絡先（Eメールアドレス）を共有するよう伝え、連絡を取り合いながら発表資料を作成するよう伝えた。

4回目（1月10日）と5回目（1月17日）の国際共修授業

1月のこの時期は、勝田中等教育学校が入試期間であったことから、中学生たちは在宅学習を行うことになっていた。そこで、第4回目と第5回目の国際共修授業では、オンライン会議システムZOOM上で茨城大学の留学生と勝田中等教育学校の生徒が集まり、それぞれ発表を準備するグループに分かれて発表資料を作成した。発表の資料はCanva⁵を用いて、オンライン上で共同編集をしながら作成した。留学生は、ひたちなか市や勝田中等教育学校について十分に知らないことも多く、中学生が説明をしなければならぬ場面も多々あった。中学生にとっては自分自身が当たり前だと思っている学校生活を自分の言葉で説明することにより、自身の学校生活についてあらためてふりかえる機会となっていた。

6回目（1月24日）の国際共修授業

6回目の国際共修授業では、茨城大学の留学生が勝田中等教育学校を訪問し、グループごとに最終発表を行った。発表では、これまでの活動を通して学んできたことを生かして、やさしい日本語を用いて話しかける、宗教やベジタリアン、アレルギーなどに対応した給食を提供するなど述べるグループがあった。また、ジェンダーや障がいの有無に配慮をするような発表もあり、在留外国人のみに捉われず、多様な背景を持つ人々を考慮している姿が窺えた。さらに、今現在勝田中等教育学校で行われている取り組みをさらに発展させるような提案もあった。例えば、勝田中等教育学校ですでに取り組んでいるグローバルデイを年2回ではなく、毎月開催し、様々な国や地域について知る機会を創出したり、国という単位だけではなく、ベジタリアンデイなど、多様な背景を持つ人々

の状況について知る機会を設けたりするといった提案や、勝田中等教育学校で行われているスポーツイベントであるクラスマッチを発展させ、テコンドーなどの特定の地域で行われているエスニックスポーツをひたちなか市在住の人々で行う「勝田ワールドスポーツフェスティバル」を実施するなどの提案があった。

計9グループの発表があり、この日の授業は各グループの発表のみで終わった。

7回目（1月31日）の国際共修授業

7回目の国際共修授業では、再度茨城大学の留学生が勝田中等教育学校を訪問し、国際共修授業の全活動についてのふりかえりを行った。ふりかえりではまずこれまでの活動について写真を見せながら、何をしてきたのかをふりかえった。そして、授業担当教員から、発表に対するコメントを行った。コメントでは、在留外国人だけではなく、ジェンダーや障がいの有無など、多様な背景を持つ人々を考慮していた点がよかったなど、肯定的なフィードバックを述べるとともに、発表では出てこなかった観点について言及をした。例えば、前述したスポーツフェスティバルについて、エスニックスポーツを行うことは興味深いですが、より多様な人々が参加できるようにするためには、ボッチャのような障がい者スポーツ、幼児から高齢者までが参加できるレクリエーションスポーツのほうがよいのではないかというようなコメントをした。また、グローバルデイについても、久保田（2015）の批判をもとに、月に1回だけの体験で「異文化」を体験したと満足してしまってもよいのか、またグローバルデイで紹介される文化が単一化されたものになってしまっていないかという危惧を述べた。そして、「その国＝その国の文化」と捉えるのではなく、国や地域内には多種多様な文化があることに気づき、日常の中に多様性があることを理解する必要があるのではないかと指摘した。

その後、グループに分かれて、これまでの活動、発表、教員の話聞いて考えたこと、感じたことについて話し合い、全ての国際共修授業の活動を終えた。

本実践のふりかえり

国際共修授業の実践後の2月に、本実践に参加した留学生と生徒にオンライン上でアンケートに答えてもらった（回収率：留学生100%、生徒92%）。プロジェクト活動全体の満足度を5段階で評価してもらったところ、留学生4.4/5.0、生徒4.5/5.0というように概ねよい評価が得られた。上記の評価に対する理由を尋ねたところ、留学生は「中学生と意見交換するのは楽しかった」、「中学校の学生みなさんと一緒に勉強したり、発表を準備したりして、楽しかったです」というように、いつも活動をともにする世代とは異なる人々とのやりとりに好意を持つ声が多く聞かれた。そして、本活動を通して学んだこととして「いろんな背景を持つ人たちと一緒に生きていくにはどうすべきか考えるようになりました」、「一つの問題を見て、様々な場面を判断して結論できるようになりました」といったことを述べ、本活動を通して視野を拡大したり、思考力を向上させたりしていたこ

とが窺えた。

生徒からは、「夜間中学校に行ったり、スーパーに行ったり充実した時間を過ごすことができた」など活動そのものを評価する声が多かった。だが、「自分の視野が実際に少しずつ変化していることが実感してきた」、「今まで思っていた多様性への考え方が変わった」など、活動を通して自身の考えに変化が起こっていることを肯定的に捉えている声も多々あった。そういった学生からは、活動を通して学んだことは何かという質問に対して、「瀬尾先生が、一つの国に一つの文化というわけでもないというお話をされていて、はっとしました。そのような見落とししていた点も考えながらこれからも国際交流を楽しんでいきたいです」、「異文化に対して学ぶ機会があることは大切だけど、それを一つの機会ですら終わりにしないで日頃から考えられるようにしたい」など、これからの決意を述べる声が聞かれた。

本実践は参加した留学生及び生徒から概ねよい評価が得られていたが、この活動に対する改善点も指摘された。留学生と生徒に本実践に対する改善点を尋ねたところ、「一つのグループに2人の留学生がいたら、コミュニケーションが、もっとうまくできると思います。」(留学生)、「複数の留学生とコミュニケーションを取れる機会がほしい」(中学生)というように、グループワークにおいて複数の留学生が参加したほうがよいという声が留学生と中学生の両者からあがった。今回の実践では、留学生9名に対して中学生37名が参加しており、留学生と中学生のバランスが悪く、複数の留学生をグループに入れることは難しかった。しかし、より多様な観点から議論をしていくうえでは、複数の留学生がグループに入ることが理想的だろう。

また、「オンラインでのグループ会議のため、グループワークの効率が通常より低下した」(留学生)、「オンライン会議のとき、あまり話し合いが進まなかった。対面のほうが話し合いはしやすいなと思った」(中学生)という声が留学生と中学生の両者から複数あがった。また、オンラインによる国際共修授業後のふりかえりでは、留学生から「中学生が早口で難しいことばを使うのでわからなかった」という声も多く述べられた。こういった留学生の声は対面の交流時にはなかったことから、オンラインによる交流の難しさがあるのではないかと考える。今回の国際共修授業では、発表の準備を1回55分、計2回のZOOMによるオンラインセッションで行った。だが、アンケートを見ると、「話し合いの時間をもっと増やしたほうがいい」と述べる者が留学生と生徒のどちらにもいたことから、各回をもう少し長めに設定するなどして、オンラインによる交流の難しさを克服する必要があるのではないかと考えている。

最後に、「互いのコミュニケーションを増やしてほしい」という声も多々あった。本実践では、最後のプロジェクト活動では留学生と生徒が協力して行い、その活動のふりかえりも留学生と生徒が一緒に行った。しかしながら、国際共修授業開始前の『バベルの学校』視聴のふりかえりやフィールドトリップのふりかえり、ZOOMでのプロジェクト活動準備のふりかえりは留学生と生徒は別々にそれぞれの学校の教員の指導のもとで行った。本活動では、「中学生からの考えや視点は参考になりました」(留学生)、「留学生を意見を聞くことで自分が思っていた一面を知ることができた」(中学生)と留学生や生徒が述べるように、互いの考えや意見を聞くことで学びへとつながっていた面がある。それを考えると、それぞれの活動のふりかえりを各学校内での共有に留めるのではなく、両校の留学生及び生徒が互いに聞けるようにすることで、両者がどのようなことを考えていたのかを知り、それが学びへとつながる可能性もあったのではないかと反省している。

次年度以降の実践では、これらの改善点を見直し、よりよい実践にしていきたいと考えている。

おわりに

本稿では、茨城大学と勝田中等教育学校が協働で行った国際共修の実践を報告した。本実践を通して、留学生と生徒はともに、視野を拡大させたり、思考力を向上させたり、新たな価値観を得たりするなどして、末松（2019）が定義するような自己成長につながる国際共修が実現できていたと考えている。すでに述べたように、今後中学・高校では、全ての学校においてオンラインなどを利用した国際交流活動を行うことが目指されている。だが、量的な数を増やしながらかも、参加する生徒の学びへとつながる質的な向上を目指す必要もあるだろう。単に数時間での交流活動で終わらせることなく、生徒自身の自己成長につながるような交流を国際共修を取り入れることで実現してほしいと切に願っている。

なお、本稿では、今後同じような実践に取り組みたいと考える読者にとって参考になるよう、より詳細に実践を記述することにした。それゆえ、実践に参加した学生のアンケートのみで実践が考察されており、参加した留学生及び生徒たちが具体的にどのようなやりとりをし、その結果どのような学びが生み出されたのかは十分に描き出せてはいない。今後は、グループでの話し合いのやりとりを録音・文字起こしし、それを分析することで、どのような学びが生み出されているのかを考察していきたいと考えている。

注

- 1) 高校を対象とした「外国語、特に英語を使う機会の拡大、幅広い教養や問題解決力等の国際的素養の育成を支援する」スーパーグローバルハイスクールの言及はあるものの、中学については、英語教育のみの言及となっている。
- 2) 本実践を行った時点での名称。現茨城大学グローバルエンゲージメントセンター。
- 3) 実際の観光プランは雨天のため実施ができず、屋内での交流会になったという。
- 4) 外国人にとってもわかりやすい簡素化された日本語。
- 5) https://www.canva.com/ja_jp/ オンラインによるグラフィックデザインのソフトウェアであり、プレゼンテーションやチラシなどを作成することができる。

引用文献

- 金子義隆, 2020, 「中学校異文化交流の効果検証」『明海大学教職課程センター研究紀要』3, 明海大学教職課程センター, 13-24.
- Knight, J. 2004. "Internationalization remodeled: Definition, approaches, and

- rationales.” *Journal of Studies in International Education*. **8(5)**, 5-31.
- 久保田竜子, 2015, 「批判的多文化主義と第二言語教育」久保田竜子編『英語教育と文化・人種・ジェンダー』（くろしお出版）, 75-96.
- Kumaravadivelu, B. 2001. “Toward a postmethod pedagogy.” *TESOL Quarterly*, **35(4)**, 537-560.
- クマラヴァディヴェル, B., 2022, 『言語教師教育論—越境なき時代の「知る・分析する・認識する・為す・見る」教師』（春風社）. 南浦涼介・瀬尾匡輝・田嶋美砂子（訳）Kumaravadivelu, B. 2012. *Language Teacher Education for a Global Society: A Module Model for Knowing, Analyzing, Recognizing, Doing, and Seeing*. Routledge.
- 教育未来創造会議, 2023, 「未来を創造する若者の留学促進イニシアティブ（第二次提言）」 (<https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/pdf/230427honbun.pdf>, 2024年8月25日6時30分閲覧)
- 文部科学省, 2013, 「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）」 (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/029/attach/1338022.htm, 2024年8月26日11時20分閲覧)
- 文部科学省, n. d., 「スーパーグローバル大学創成支援」 (https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1360288.htm, 2024年8月26日14時10分閲覧)
- 桜井良, 2020, 「中学生と留学生による海洋保全をテーマとした国際交流プログラムの実施」『政策科学』27(2), 立命館大学政策科学会, 101-110.
- 仙石裕・永田浩一・桑原摩帆, 2022, 「日本の大学で学ぶ留学生と中学生の学び合い—中学生を対象とした国際共修と世代間学修の視点からの分析」『グローバル人材育成教育研究』10(2), グローバル人材育成教育学会, 2-10.
- 嶋田和子, 2013, 『できる日本語 中級 本冊』（アルク）.
- 末松和子, 2017, 「「内なる国際化」でグローバル人材を育てる—国際共修を通じたカリキュラムの国際化」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』3, 東北大学高度教養教育・学生支援機構, 41-51.
- 末松和子, 2019, 「はじめに」末松和子・秋庭裕子・米澤由香子編『国際共修—文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』（東信堂）, i-vi.
- 東京新聞, 2023, 「<突撃イバラキ>アジア人たちの楽園 常総の亀仙人街」（2023年3月23日8時20分掲載） (<https://www.tokyo-np.co.jp/article/239618>, 2024年8月28日6時30分閲覧)
- Wachter, B. 2003. “An introduction: Internationalization at home in context.” *Journal of Studies in International Education*. **7 (1)**, 5-11.